

國學院大學学術情報リポジトリ

弥生時代のト骨にみられる技術：
製作技法とト骨方法を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浪形, 早季子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001997

弥生時代の卜骨にみられる技術

—製作技法と卜骨方法を中心に—

浪形 早季子

要旨

卜骨は弥生時代以降を代表する祭祀具であり、その技法は文献や神社神事からもうかがい知ることが出来る。しかし、初期の骨を用いた卜占方法とは如何なるものであったのか、その様相ははっきりしない。本論文では著者が前号で記載できなかった、弥生時代の卜骨の技法について焦点を当てた。特に整形・加工技術の中でも肩甲棘のケズリ、焼灼のパターンについて時期ごとにその変遷を追った。その結果、弥生時代中期にはその技法にある程度の共通性がみられたが、弥生時代後期になると分化し、地域的な偏りがみられることがわかった。従来、卜骨技法は、古墳時代、古代に向けて規格化されていくと考えられていたが、弥生時代においては様々な技法が各地でみられ、統一化されていなかったことが明らかとなった。

キーワード

卜骨、弥生時代、ケズリ、焼灼パターン、規則性

はじめに

筆者は弥生時代の卜骨の再検討を行うために、日本全国の遺跡から出土した卜骨・卜甲を集成し、本研究紀要の第1号に報告した。その中で、卜骨に使用される動物種及び部位について、時期的変遷と地域性を示し、特に東海地方を境に西では卜骨の素材にイノシシを用いることが多く、東ではシカが多く用いられることを明らかにした。

本論ではその際に議論できなかった卜骨の製作技法及び焼灼方法についてまとめ、卜占方法について若干の考察を試みる。まずは時代順に卜骨の製作技法・焼灼方法について述べ、時期ごとの特徴を示す。また動物種による違いがあるのかを検討する。その上で、卜占において重視されていたものの時期的変遷を考察し、地域的な特徴についても考察を加えた。

1. 従来の弥生時代における卜占技法

これまで卜骨の製作技法及び焼灼方法については、出土量の多い遺跡の報告書を中心に議論されてきた。主に、製作技法である「鑽」、「ケズリ」、「ミガキ」及び卜占行為である「焼灼の方法」について示されてきた。そのなかでも、系統的な検討を行った3氏の分類について以下に挙げる。

神澤勇一氏は神奈川県三浦半島に点在する海蝕洞穴出土の卜骨を契機に、全国の遺跡から出土した弥

生時代から古代における卜骨を体系的にまとめ、第Iから第V形式に分類した(図1)(神澤, 1976・1987a・1987b・1990)。

「第I形式」 基本的には整形を施さないで、素材の片面に点状焼灼を行う。僅かに磨いただけの獣骨の片面か、薄い部分を特に選び、偏円形に灼くものであり、例外的である。

「第II形式」 骨の表面を僅かに磨き、ときに一部を薄く削ぎ、鑽は作成しない。焼灼は骨の両面やときには側面まで使い、焼灼と占う面は同一面で行われる。焼灼痕は、規則的に列状をなしている場合、ほぼ列状をなしている場合、不規則的に群集している場合がある。弥生時代の卜骨はすべてこの第II形式で、他の時代にはこの形式は認められない。

「第III形式」 骨の片面を大きく削るように削り、刀子状の刃物の先端で、平面が不整円形、断面が摺鉢形に近い粗雑な鑽を彫りこむ。反対側の面は磨く他、薄く削る場合もみられ、鑽の内側をギザギザのまま灼くのが特徴である。

「第IV形式」 骨面を磨くか、粗く切り削って面を僅かに調整した後、平面が円形、断面が半円形の整った鑽を設け、鑽の内側に焼灼を加える。鑽の内側の螺旋状の線より錐状の工具を回転させたと推定する。

「第V形式」 整形した獣骨、亀骨の片面に長方形の鑽を彫り、鑽の内側底面を十字形に灼く。

神澤氏はⅡ→Ⅳ→Ⅲ・Ⅰ→Ⅴと形式が変遷したと提示し、第Ⅱ形式のみ弥生時代の技法であり、第Ⅱ形式以外は古墳時代以降のものとしている。つまり、弥生時代の卜占技法は、骨面を点状に灼き、焼灼と同一面に亀裂を生じさせるのに対して、古墳時代以降の卜骨は鑽を設け、その内部を灼き、反対側の面に表われた亀裂の形状で占い、両者には大きな相違があると示した。神澤は前者を「灼面卜面一致型」、後者を「灼面卜面分離型」と呼んでいる。

また焼灼痕にも規則性があることを示し、(1) 1個単独存在、(2) 数個ないし十数個が点列状に存在、(3) 数個単位で2～3個所に散在、(4) 少数が散漫に散在、(5) 多数が不規則的に散在と5つの分類基準を提示した。

宮崎泰史氏は畿内の亀井遺跡、森の宮遺跡、鬼虎川遺跡出土の弥生時代の卜骨より、焼灼方法が大きく二分されることを示した。(1) 比較的骨厚の薄い肩甲下窩に焼灼を行う場合と、(2) 肋骨面肩甲頸、後縁等の骨の厚い部分に焼灼を行う場合がある(宮崎, 1982・1984・1999)。両者の相違は時間的なものではなく、どの面で結果を読み取るかの違いであり、前者は焼灼面と反対の外側面に表われた色調の変化や亀裂の方向で占う、後者は焼灼面と同一面の外側面で占うことを示した。前者は神澤のいう「灼面卜面分離型」、後者は「灼面卜面一致型」である。

北浦弘人氏は、弥生時代から古墳時代前期初頭にかけての卜骨が最多出土している鳥取県青谷上寺地遺跡の資料より、整形行為と焼灼箇所の関係から卜骨の変遷モデルを提示している。北浦氏は青谷上寺地遺跡の卜骨91点について焼灼痕、ケズリ、ミガキ、鑽の4つの属性について分析を行っている(北浦, 2001・2002・2006・2008)。

「焼灼」及び「ケズリ」については各々4つの類型に分類している(図2, 図3)。

「焼灼1」 肩甲頸の肋骨面に焼灼を行うもの。厚い部分であるため、熱が伝わりにくく、焼灼面が卜面となる。

「焼灼2」 棘上窩、棘下窩に焼灼を行うもの。薄い部分であるため裏面に熱が伝わりやすく、卜面は焼灼を施した面の裏面になる。

「焼灼3」 焼灼範囲が棘上窩、棘下窩から背縁にかけて広がるもの。薄い部分であるため裏面に熱が

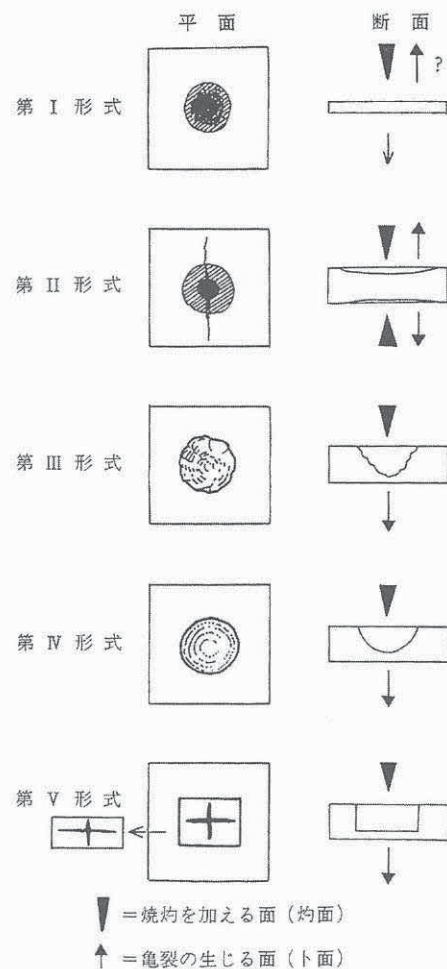


図1 神澤勇一による焼灼形式模式図

伝わりやすく、卜面は焼灼を施した面の裏面になる。

「焼灼4」 肩甲頸から背縁にかけての外側面を削り取って広い範囲に焼灼を行うもの。薄い部分では裏面に熱が伝わりやすく、卜面は焼灼を施した面の裏面になるが、肩甲頸部では裏面に焼灼の影響が及ばない場合がある。

「ケズリA」 整形行為を行わないもの。

「ケズリA'」 刃物を用いずに肩甲骨を除去した可能性を考慮し、肩甲棘が破損しているもの。

「ケズリB」 肩甲棘の上方を削るもの。わずかに削るものから根元を残しながら大きく削るものまで含む。

「ケズリC」 肩甲棘を根元から全去したもの。肩甲骨内部の海綿質が覗く。

「ケズリDa」 肩甲棘を全去し、さらに肩甲頸、関節窩まで削り取ったもの。肩甲頸外側面側に関節窩側から斜め方向に刃物をあてて削り、背縁まで薄皮を剥ぐように骨を削る。あらわになった肩甲骨内部

の海綿質を除去し、整形面を平滑にするものもある。「ケズリDb」肩甲骨を全去し、さらに肩甲骨頸、関節窩まで削り取ったもの。肩甲骨に対し、鉛直方向から肩甲骨頸を刃物で半裁し、背縁にかけて薄皮を剥ぐように骨を削る。または肩甲骨に対し水平方向から関節窩に刃物を当て、背縁まで削る。あらわになった肩甲骨内部の海綿質を除去し、整形面を平滑にするものもある。

整形・加工技術を行う要因として神澤氏は、「ミガキ」や「ケズリ」などの骨の整治は焼罅の発生を促す、焼罅を見やすくする、焼灼用具を安定状態で密着させる等の意図を持つとした。また、北浦氏は「ミガキ」行為の要因は焼灼痕に切られているので焼灼前の行為であること、焼灼が施される肩甲骨頸や棘上窩、棘下窩にみられることから、神澤氏の意見と同様、焼灼痕を明確にするための行為であることを示した。

神澤氏は遺跡出土のト骨に早くから着目して全国の出土資料を集成し、製作技法やト占方法について概括し、大きな枠組みを定めた。ト骨の体系的な形式分類を全出土資料について行ったが、弥生時代に適するものは第Ⅱ形式のみとした。しかし、弥生時代のみに着目した場合、さらに詳細な検討が必要である。

そこで、北浦氏は、多量のト骨が出土した鳥取県青谷上寺地遺跡の資料を用い、弥生時代の中でも変遷パターンが捉えられるとし、「焼灼痕」、「ケズリ」、「ミガキ」、「鑽」の4つの属性分類を行い、時代に伴って①ケズリによるト骨の平板化と②焼灼範囲の拡張という変遷モデルを提示している。「鑽」は神澤氏の指摘にあるように弥生時代には基本的には見

られない製作技法であり、青谷上寺地遺跡出土のト骨3点に鑽の可能性のあるものが指摘されている以外は現在確認できていない（北浦，2008）。ゆえに、「鑽」は弥生時代の時期的変遷に焦点を当てる場合には有効でないと考える。また、「ミガキ」に関しても筆者がまだ実見できていない資料もあり、かつ報告書に記載されていないものも多く、有用ではないため、本論では用いない。そこで筆者は、弥生時代の中での時期的変遷及び地域の特徴を見出すには、北浦氏の提示する「ケズリ」及び「焼灼」パターンの技術的特徴を捉えることが重要であると考え、この2つの技術に着目する。

2. 分類基準

筆者が今回検討に用いたのは、時期や種及び部位が判明しており、かつ製作技法・焼灼方法が捉えられるもの189例である（表1）。そのうち、肩甲骨を用い、かつ焼灼が施され、焼灼方法が捉えられるものは160例である。

まず、製作技法については上記に記した北浦氏の「ケズリの技法」の4形式にそって基本的には分類する。

ただし、ケズリDについては、北浦氏はDaとDbに区分しているが、どちらにも分類できない場合はケズリDとした。

北浦氏の分類では「ケズリ」は「整治と称されるト骨の突出する部分や厚みのある部分を除去・平板化する整形行為のうち、特に肩甲骨棘及び肩甲骨頸から関節窩まで及ぶ部分について刃物で除去し平板化する整形行為の有無及びその度合いについて検討するもの」としており、肩甲骨部分についての整形分類

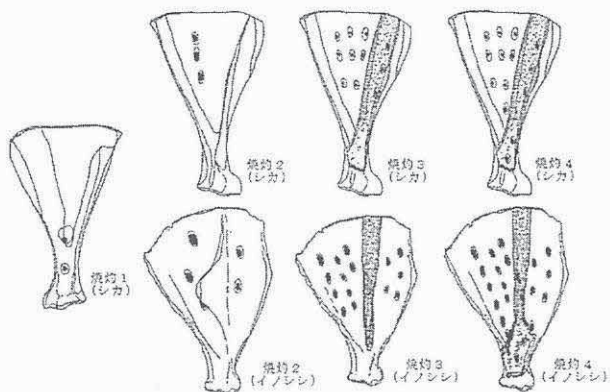


図2 北浦弘人による焼灼痕の類型（北浦，2008より）

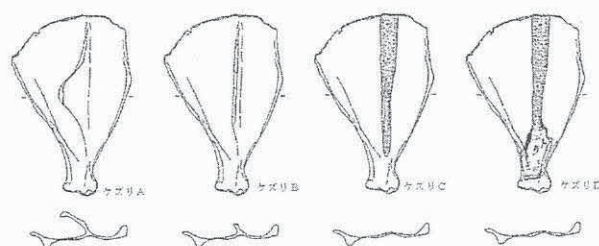


図3 北浦弘人によるケズリの類型（北浦，2008より）

	出土遺跡	時期	使用種類など	使用部位	左右	焼灼パターン	ケズリパターン	焼灼痕の規則性
1	唐古・鍵遺跡 20 次	弥生時代前期	イノシシ	大腿骨		—	—	①
2	唐古・鍵遺跡 22 次	弥生時代前期	イノシシ	橈骨	L	—	—	③ or ④
3	唐古・鍵遺跡 33 次	弥生時代前期	シカ	肩甲骨	L	2	A	②
4	阿方遺跡	弥生時代前期末～中期前葉	シカ	肩甲骨	L	なし	B	なし
5	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期末～中期後葉	イノシシ	肩甲骨	L	2	A'	②
6	青谷上寺地遺跡	弥生時代前期末～中期後葉	イノシシ幼獣	肩甲骨	R	2	B	②
7	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期中葉	シカ	肩甲骨	L	1	A	②
8	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期中葉	シカ	肩甲骨	R	1	A	②
9	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期中葉～後葉	イノシシ	肩甲骨	R	2	A	②
10	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期中葉～後葉	イノシシ	肩甲骨	R	2	A'	②
11	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期中葉～後葉	シカ	肩甲骨	R	1	A'	②
12	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期中葉～後葉	イノシシ	肩甲骨	R	2	A'	②
13	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期中葉～後葉	シカ	肩甲骨	L	2	A'	②
14	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期中葉～後葉	イノシシ	肩甲骨	R	2	B	②
15	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期中葉～後葉	イノシシ幼獣	肩甲骨	L	2	C	②
16	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期中葉～後葉	イノシシ	肩甲骨	R	2	Da	②
17	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期中葉～後葉	イノシシ	肩甲骨	R	5	Da	②
18	池子遺跡群	弥生時代中期後半	シカ	肩甲骨	R	2	A	⑤
19	池子遺跡群	弥生時代中期後半	シカ	肩甲骨		2	A	②
20	池子遺跡群	弥生時代中期後半	シカ	肩甲骨	R	2	A	② ?
21	池子遺跡群	弥生時代中期後半	シカ	肩甲骨		2	A?	③
22	池子遺跡群	弥生時代中期後半	シカ	肩甲骨	L	3	A	② or ⑤
23	池子遺跡群	弥生時代中期後半	シカ	肩甲骨	R	2	A	④
24	池子遺跡群	弥生時代中期後半	イノシシ	肩甲骨	L	2	A	② or ④
25	亀井遺跡	弥生時代中期後半	イノシシ	肩甲骨	R	2	C	②
26	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	シカ若獣	肩甲骨	R	2	A	②
27	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ若獣	肩甲骨	L	2	A'	②
28	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ	肩甲骨	L	2	A'	②
29	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ若獣	肩甲骨	L	2	A'	②
30	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ若獣	肩甲骨	L	2	A'	②
31	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	シカ	肩甲骨	R	1	B	②
32	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ幼獣	肩甲骨	R	2	B	②
33	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ若獣 ?	肩甲骨	L	2	B	②
34	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ	肩甲骨	L	2	B	②
35	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ若獣 ? (石鏝刺さる)	肩甲骨	L	2	A'	②
36	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ若獣 ?	肩甲骨	R	2	A'	②
37	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ	肩甲骨	L	2	B	②
38	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ	肩甲骨	L	2	A	②
39	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ幼獣 or 若獣	肩甲骨	R	2	A'	②
40	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ	肩甲骨	L	2	A'	②
41	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ若獣	肩甲骨	R	2	A'	②
42	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	シカ	肩甲骨	R	2	A'	②
43	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	シカ	肩甲骨	R	2	A'	②
44	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	シカ	肩甲骨	L	2	B	②
45	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ	肩甲骨	R	2	B	②
46	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ幼獣	肩甲骨	L	2	B	②
47	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	シカ	肩甲骨	L	2	B (外側面・前縁削り)	②
48	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ	肩甲骨	R	2	B	②
49	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ幼獣 or 若獣	肩甲骨	R	2	A	②
50	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ	肩甲骨	R	2	A	②
51	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ幼獣	肩甲骨	R	2	A'	②
52	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	シカ幼獣	肩甲骨	R	2	A	②
53	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ (石鏝刺さる)	肩甲骨	L	2	B	②
54	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ	肩甲骨	L	2	B	②
55	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	シカ	肩甲骨	L	2	Da	②
56	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ	肩甲骨	R	2	A'	②
57	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ	肩甲骨	L	2	A'	②
58	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ	肩甲骨	L	2	A	②
59	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ	肩甲骨	R	2	A'	②
60	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	イノシシ	肩甲骨	L	2	A	②
61	青谷上寺地遺跡	弥生時代中期後葉	シカ	肩甲骨	L	2	A'	②
62	菊間遺跡	弥生時代中期	シカ	肩甲骨	R	5	A?	② or ⑤
63	間口洞窟遺跡	弥生時代中期	シカ	肩甲骨	R	(肋骨面・外側面両方)	B (表面の一部削る)	③
64	間口洞窟遺跡	弥生時代中期	シカ	肋骨		—	—	② ?
65	唐古・鍵遺跡 19 次	弥生時代中期	イノシシ	肩甲骨	R	2	B	②
66	唐古・鍵遺跡 20 次	弥生時代中期	イノシシ	肩甲骨	R	1	A	②
67	唐古・鍵遺跡 20 次	弥生時代中期	イノシシ	肩甲骨	R	1	A	②
68	唐古・鍵遺跡 20 次	弥生時代中期	イノシシ	肩甲骨	L	1	A	②
69	唐古・鍵遺跡 20 次	弥生時代中期	シカ	肩甲骨	L	2	A	②
70	唐古・鍵遺跡 20 次	弥生時代中期	イノシシ	肩甲骨	L	2	A	②
71	唐古・鍵遺跡 20 次	弥生時代中期	イノシシ	肩甲骨	L	2	A	②
72	唐古・鍵遺跡 20 次	弥生時代中期	イノシシ	肩甲骨	R	2	A	②
73	唐古・鍵遺跡 20 次	弥生時代中期	イノシシ	肩甲骨	L	2	A	?
74	唐古・鍵遺跡 20 次	弥生時代中期	イノシシ	肩甲骨	R	2	A	?
75	唐古・鍵遺跡 23 次	弥生時代中期	イノシシ	肩甲骨	R	2	A	④
76	唐古・鍵遺跡 23 次	弥生時代中期	シカ	肩甲骨	R	2	B?	②
77	亀井遺跡	弥生時代中期	イノシシ若獣	肩甲骨	R	2	A'	①
78	亀井遺跡	弥生時代中期	シカ	肩甲骨	R	3	A'	②
79	森之宮遺跡	弥生時代中期	イノシシ若獣	肩甲骨		2	B (肋骨面後縁に加工)	④
80	新保田中村前遺跡	弥生時代中期～後期	イノシシ	肩甲骨	R	2	B	②
81	新保田中村前遺跡	弥生時代中期～後期	イノシシ	肩甲骨	R	2	B	②
82	新保田中村前遺跡	弥生時代中期～後期	イノシシ	肩甲骨	L	なし	D	なし
83	新保田中村前遺跡	弥生時代中期～後期	イノシシ若獣	肩甲骨	L	2	B	②
84	新保田中村前遺跡	弥生時代中期～後期	イノシシ若獣	肩甲骨	L	2	B	① ?
85	新保田中村前遺跡	弥生時代中期～後期	ニホンジカ若獣	肩甲骨	R	4	B?	②
86	新保田中村前遺跡	弥生時代中期～後期	ニホンジカ	肩甲骨	R	なし	B + 後縁切断	なし
87	新保田中村前遺跡	弥生時代中期～後期	ニホンジカ	肩甲骨	L	2	B	① ?
88	新保田中村前遺跡	弥生時代中期～後期	ニホンジカ	肩甲骨	L	なし	B	なし
89	足守川加茂 B 遺跡	弥生時代後期前半	イノシシ若獣	肩甲骨	R	2	A'	②
90	足守川加茂 B 遺跡	弥生時代後期前半	シカ	肩甲骨	L	2	B	②
91	足守川加茂 B 遺跡	弥生時代後期前半	イノシシ	肩甲骨	R	1 ? (肋骨面・外側面両方)	B	②
92	足守川加茂 B 遺跡	弥生時代後期前半	シカ若獣 ?	肩甲骨	L	1 ? (肋骨面・外側面両方)	B (臼に向かって削る)	②
93	足守川加茂 B 遺跡	弥生時代後期前半	シカ	肩甲骨	L	1	B	②
94	足守川加茂 B 遺跡	弥生時代後期前半	シカ	肩甲骨	L	1	B	②
95	足守川加茂 B 遺跡	弥生時代後期前半	シカ	肩甲骨	L	なし	C	なし
96	カラカミ遺跡	弥生時代後期前半	シカ	肩甲骨	R	4	A	②
97	カラカミ遺跡	弥生時代後期前半	イノシシ	肩甲骨	R	4	A	②
98	カラカミ遺跡	弥生時代後期前半	イノシシ	肩甲骨	L	4	A	②
99	菊間遺跡	弥生時代後期前半かそれ以降	シカ	肩甲骨	R	5	A?	② or ⑤

表 1 弥生時代の遺跡出土ト骨の一覧表

	出土遺跡	時期	使用種類など	使用部位	左右	焼灼パターン	ケズリパターン	焼灼痕の規則性
100	菊間遺跡	弥生時代後期前半かそれ以降	シカ	肩甲骨	R	5 (臼の縁まで削る)	A?	② or ⑤
101	向ヶ岡貝塚	弥生時代後期中葉	シカ	寛骨 (坐骨部分)	L	—	—	⑤
102	向ヶ岡貝塚	弥生時代後期中葉	シカ	四肢骨片?	—	—	—	①?
103	カラカミ遺跡	弥生時代後期中頃	シカ	肩甲骨	L	4	A	②
104	長崎遺跡	弥生時代後期中葉～後葉	シカ	肩甲骨	L	3 (焼灼痕多い)	A' (骨面を刃物で削る)	②
105	長崎遺跡	弥生時代後期中葉～後葉	イノシシ	肩甲骨	L	5	A	②
106	長崎遺跡	弥生時代後期中葉～後葉	イノシシ	肩甲骨	R	2	A'	②?
107	長崎遺跡	弥生時代後期中葉～後葉	シカ	肩甲骨	L	3 (焼灼痕多い)	A' (骨面を刃物で削る)	②
108	長崎遺跡	弥生時代後期中葉～後葉	シカ	肩甲骨	R	5	A (骨面を刃物で削る)	②
109	長崎遺跡	弥生時代後期中葉～後葉	シカ	肩甲骨	R	5	A'	②
110	長崎遺跡	弥生時代後期中葉～後葉	イノシシ幼獣	肩甲骨	R	2	(関節窩は削って面取りし、被熱?)	②
111	貝取岡2 洞窟	縄文文 (恵山文化) A.D. ～ B.C. 境界年 ～ B.C.300	エゾジカ	肩甲骨	L	5	C	②?
112	間口洞窟遺跡	弥生時代後期	シカ	肩甲骨	—	5	B	②
113	間口洞窟遺跡	弥生時代後期	シカ	肋骨	—	—	—	② or ⑤
114	生仁遺跡	弥生時代後期	ホンシュウジカ	肩甲骨	R	4or5 (焼灼痕多い)	A'orB	②
115	生仁遺跡	弥生時代後期	ホンシュウジカ	肩甲骨	L	なし	?	なし
116	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	アナグマ?	肩甲骨	L	2	B	②
117	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	イノシシ	肩甲骨	R	2	B	②
118	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	イノシシ若獣	肩甲骨	R	2	B	②
119	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	シカ若獣	肩甲骨	R	2	C	②
120	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	イノシシ	肩甲骨	L	4	C	②
121	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	シカ	肩甲骨	R	5	Db	②
122	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	シカ	肩甲骨	R	5	Db	②
123	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	シカ	肩甲骨	R	5	Db	②
124	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	シカ	肩甲骨	L	5	Db	②
125	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	イノシシ	肩甲骨	L	5	Db	②
126	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	イノシシ	肩甲骨	L	5	Db	②
127	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	イノシシ	肩甲骨	L	5	Db	②
128	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	シカ	肩甲骨	R	2	A'	②
129	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	イノシシ	肩甲骨	R	2	B	②
130	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	イノシシ	肩甲骨	L	2	C (外側縁、後縁削り)	②
131	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	イノシシ	肩甲骨	R	2	A'	②
132	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	イノシシ	肩甲骨	L	2	B	②
133	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	シカ	肩甲骨	L	2	B	②
134	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	イノシシ	肩甲骨	R	2	A'	②
135	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	イノシシ幼獣	肩甲骨	R	2	A'	②
136	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	イノシシ幼獣	肩甲骨	R	2	C	②
137	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	シカ	肩甲骨	L	2	A'	②
138	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	シカ	肩甲骨	R	4	C	②
139	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	シカ	肩甲骨	R	2	C	②
140	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	イノシシ	肩甲骨	R	5	Da	②
141	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	イノシシ	肩甲骨	R	5	Db (後縁肋骨面削る)	②
142	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期	イノシシ	肩甲骨	L	2	C	②
143	上東遺跡	弥生時代後期	イノシシ	肩甲骨	R	1	B?	②
144	上東遺跡	弥生時代後期	シカ	肩甲骨	L	なし	Db	なし
145	上東遺跡	弥生時代後期	シカ	肩甲骨	R	5	Db	②
146	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期初頭～古墳初頭	イノシシ	肩甲骨	R	1	A	②
147	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期初頭～古墳初頭	シカ	肩甲骨	L	2	C	②
148	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期初頭～古墳初頭	イノシシ	肩甲骨	L	2	C	②
149	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期初頭～古墳初頭	シカ	肩甲骨	L	5	Db	②
150	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期初頭～古墳初頭	シカ	肩甲骨	L	1	Db (整側を焼灼せず)	②
151	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期初頭～古墳初頭	イノシシ	肩甲骨	R	2	B	②
152	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期初頭～古墳初頭	イノシシ若獣	肩甲骨	L	2	C	②
153	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期初頭～古墳初頭	シカ	肩甲骨	R	2	C	②
154	こうもり穴洞穴	弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭	イノシシ	右肩甲骨	—	4	C (前縁切断)	②
155	こうもり穴洞穴	弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭	シカ	左肩甲骨	—	3? (棘裏部分も焼灼)	A	②
156	こうもり穴洞穴	弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭	イノシシ	左寛骨	—	—	—	②
157	こうもり穴洞穴	弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭	シカ	第2or第3 胸椎	—	—	—	②
158	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期末～古墳初頭	シカ	肩甲骨	L	2	C	②
159	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期末～古墳初頭	シカ	肩甲骨	R	5	Da	②
160	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期末～古墳初頭	イノシシ	肩甲骨	R	2	A'	②
161	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期末～古墳初頭	シカ奇形	肩甲骨	L	4	A	②
162	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期末～古墳初頭	イノシシ	肩甲骨	R	2	B	②
163	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期末～古墳初頭	シカ	肩甲骨	L	5	Da	②
164	青谷上寺地遺跡	弥生時代後期末～古墳初頭	シカ	肩甲骨	L	5	Db	②
165	池子遺跡群	弥生時代後期～古墳時代前期	シカ	寛骨	L	—	—	②
166	こうもり穴洞穴	弥生時代後期～古墳時代前期	シカ	肩甲骨	R	5	C (後縁一部切断)	②
167	こうもり穴洞穴	弥生時代後期～古墳時代前期	イノシシ	肩甲骨	L	2	C (後縁一部切断)	④
168	こうもり穴洞穴	弥生時代後期～古墳時代前期	イノシシ	肩甲骨	L	4	C	②
169	こうもり穴洞穴	弥生時代後期～古墳時代前期	イノシシ	肩甲骨	L	4	C	②
170	こうもり穴洞穴	弥生時代後期～古墳時代前期	イノシシ	肩甲骨	L	5	D	②
171	こうもり穴洞穴	弥生時代後期～古墳時代前期	シカ	肩甲骨	R	3	A	②
172	こうもり穴洞穴	弥生時代後期～古墳時代前期	シカ	肩甲骨	R	5	A	② or ⑤
173	こうもり穴洞穴	弥生時代後期～古墳時代前期	イノシシ	寛骨	L	—	—	②
174	こうもり穴洞穴	弥生時代後期～古墳時代前期	シカ	寛骨	L	—	—	②
175	こうもり穴洞穴	弥生時代後期～古墳時代前期	シカ	寛骨	R	—	—	②
176	こうもり穴洞穴	弥生時代後期～古墳時代前期	シカ	肋骨	R	—	—	②
177	こうもり穴洞穴	弥生時代後期～古墳時代前期	シカ	肋骨	R	—	—	②
178	池子遺跡群	弥生時代後期～古墳時代	シカ	肋骨	—	—	—	②
179	池子遺跡群	弥生時代後期～古墳時代	シカ	寛骨	—	—	—	②
180	池子遺跡群	弥生時代後期～古墳時代	シカ	肩甲骨	L	5 (肋骨面・外側面両方)	B?	②
181	池子遺跡群	弥生時代末～古墳時代前期	シカ	胸骨	—	—	—	⑤
182	池子遺跡群	弥生時代末～古墳時代前期	シカ	肩甲骨	R	2	B?	②?
183	池子遺跡群	弥生時代末～古墳時代前期	イノシシ	肩甲骨	R	5	Db	②
184	池子遺跡群	弥生時代末～古墳時代前期	イノシシ	肩甲骨	L	なし	Db	なし
185	池子遺跡群	弥生時代末～古墳時代前期	シカ	肩甲骨	R	5	D	②
186	池子遺跡群	弥生時代末～古墳時代前期	シカ	寛骨	R	—	—	②
187	池子遺跡群	弥生時代末～古墳時代前期	シカ	寛骨	—	—	—	②
188	池子遺跡群	弥生時代末～古墳時代前期	シカ/イノシシ	肋骨	—	—	—	②
189	池子遺跡群	弥生時代末～古墳時代前期	イノシシ	肩甲骨	L	5	Db	③

表1 弥生時代の遺跡出土ト骨の一覧表

である。ケズリB～Dのすべてにおいて、前縁や後縁を削る行為のあるものもみられたが、平板化する整形行為にあたらなかったため、整形行為については北浦氏の示すケズリの4分類にのっとった（上項目参照）。

「焼灼」については、北浦氏の分類基準に一項目追加し、焼灼1～5まで設けた。追加した分類定義を「焼灼3」とするので、北浦氏の「焼灼3」を「焼灼4」へ、「焼灼4」を「焼灼5」とする。筆者が追加した「焼灼3」は「焼灼2」に加え、さらに肩甲棘部分にも焼灼を行うものである。このとき、肩甲棘には加工が施されていない。この焼灼方法は、「焼灼4」及び「焼灼5」が肩甲棘の削りとった部分にも焼灼を施すのとは異なり、肩甲棘への整形・加工がまだ施されていない段階における焼灼であるため、「焼灼4」や「焼灼5」よりも前段階であると考え、「焼灼3」とした。

また北浦氏は焼灼面とト面についての分類も行っているが、一つのト骨で肋骨面と外側面の両面に焼灼を行うものや、薄い部分に焼灼を施した場合であっても、裏面に亀裂が入らず、ト面とならない例も数多くみられたため、灼面とト面については、ト占行為への検討も含めて更なる検討が必要であると考え、本論では議論に用いない。

以下、北浦氏の分類基準を軸に加工した焼灼方法についての分類基準である。

「焼灼1」 肩甲頸の肋骨面に焼灼を行うもの。

「焼灼2」 棘上窩、棘下窩に焼灼を行うもの。

「焼灼3」 棘上窩、棘下窩及び加工の施されない肩甲棘部分に焼灼を行うもの。

「焼灼4」 焼灼範囲が棘上窩、棘下窩から背縁にかけて広がるもの。削りとった肩甲棘部分にも焼灼が施される。

「焼灼5」 肩甲頸から背縁にかけての外側面を削り取って広い範囲に焼灼を行うもの。削りとった肩甲棘部分にも焼灼が施される。

さらに、「焼灼痕の並び方」についても重要になると考えられるため、神澤氏の5分類を用い、これらを含めた形式分類を表1に示す。焼灼痕の並び方については神澤氏の(1)～(5)を焼灼痕①～⑤とする。ただし、この焼灼痕の並び方については、完存資料がほとんどみられないため、一部をみて判

断すると、複数の分類項目に相当し、また大半の資料が何らかの規則性を持っているため、分類項目を再検討する必要がある。

「ケズリ」及び「焼灼」の分類基準にそって、各時代ごとにまとめたものを図4に示した。

3. 弥生時代前期の製作技術とト占方法

弥生時代前期のト骨は唐古・鍵遺跡から3例出土している⁽¹⁾。イノシシ大腿骨、イノシシ左橈骨、シカ左肩甲骨を用いている。前期の資料3点のうち2点は四肢骨を使用しており、整形・加工はみられない。また肩甲骨を使用したト骨にも整形・加工は施されていない。大腿骨は外側に焼灼痕が1ヶ所みられ、左橈骨の焼灼痕は外側に3ヶ所、内側に2ヶ所みられる。これらの四肢骨はともに骨の内側から焼灼が行われており、骨が切断されてから焼灼が行われたと考えられる。唐古・鍵遺跡の大腿骨には切断痕は確認されないが、左橈骨には近位端近くに切断

弥生時代中期

	ケズリ A	ケズリ A'	ケズリ B	ケズリ C	ケズリ Da	ケズリ Db	ケズリ D
焼灼1	5	1	1				
焼灼2	21	20	15	2	2		
焼灼3	1	1					
焼灼4							
焼灼5	1		1		1		

弥生時代後期

	ケズリ A	ケズリ A'	ケズリ B	ケズリ C	ケズリ Da	ケズリ Db	ケズリ D
焼灼1			5				
焼灼2		8	7	5			
焼灼3		2					
焼灼4	4			2			
焼灼5	4	1	1	1	1	9	

弥生時代後期～古墳時代前期

	ケズリ A	ケズリ A'	ケズリ B	ケズリ C	ケズリ Da	ケズリ Db	ケズリ D
焼灼1	1					1	
焼灼2		1	3	6			
焼灼3	2						
焼灼4	1			3			
焼灼5	1		1	1	2	4	2

図4 「ケズリ」と「焼灼パターン」の時期別区分
※セルの色の濃いものほど点数が多いものを示す

痕がみられる。ただし、これは解体時に伴うものかどうかは判断できない（田原本町教育委員会、1986）。また、焼灼痕は裏面にまで影響を及ぼしていない部分もみられ、「灼面ト面一致型」である。しかし、四肢骨の犠行為がト占行為に2面必要であったことを意味するのであれば、「灼面ト面一致型」ともいえない。また破片であるため明確ではないが、四肢骨の焼灼痕はまばらに施され、規則性はない。

4. 弥生時代中期の製作技法とト占方法

弥生時代中期の資料は73点出土しており、神奈川県の間口洞窟遺跡出土のシカの肋骨1点を除くと、すべてシカ、イノシシの肩甲骨を使用している。図4にみられるように、整形・加工技術は「ケズリA」ないしは「ケズリB」に集中している。つまり、肩甲骨への加工は施されないか一部削る程度である。また、焼灼方法は、「焼灼2」に集中している。焼灼は棘上窩か棘下窩に施され、肩甲骨全面を広く使用していない。「ケズリC」や「ケズリD」のような肩甲骨を全去し、平坦面を拡大させても、全面への多量の焼灼は行われない。また「焼灼1」も多くみられ、加工の施していない骨の厚い部分への焼灼も頻繁に行われていることがわかる。中期段階では、骨の薄化への意識はあまり強くなく、厚みをもった肩甲骨への焼灼が行われ、また肩甲骨を全去し徹底的に平板化し、広い面積を得るような加工も行われなかったと考えられる。また、この時期の焼灼痕の数はそれほど多くなく、後期段階にみられるような多量の焼灼を行うという様相はみられない。このことは、使用する種や部位が他地域と明らかに異なる三浦半島や房総半島の例を除くと、その傾向はより一層顕著になる。

5. 弥生時代後期／弥生時代後期～古墳時代前期の製作技法とト占方法

弥生時代後期の資料57点、弥生時代後期～古墳時代前期の資料47点が出土している。図5にみられるように、弥生時代中期と比較して、「ケズリC」や「ケズリD」、「焼灼4」や「焼灼5」が増加する。あまり加工をせずに焼灼も数多く施さないものから、骨全体に及ぶ加工を施し、全面に焼灼を施すものまで

様々なものが出土している。中期と同様に、積極的な整形・加工をせず、骨の厚い肩甲骨部分への焼灼を、継続して行うものがある一方で、肩甲骨全去の例が増加する。骨を薄く平板化し、焼灼面積を広げ、焼灼痕を増加させた例が増える。

肩甲骨への加工がみられないものは、長崎県壱岐郡カラカミ遺跡や静岡県長崎遺跡に集中している。また三浦半島や房総半島の資料にもあまり加工がみられない。焼灼面積が広がるとともに焼灼痕も増加するが、特に静岡県長崎遺跡や長野県生仁遺跡の例にみられるように、東海地方から甲信越地方の資料に際立った数の焼灼痕がみられる。

また、弥生時代後期～古墳時代前期の資料の中で、肩甲骨使用例は29点にとどまり、3分の1以上が他の部位を使用する。これは三浦半島や房総半島出土例に肩甲骨以外の肋骨や寛骨、椎骨、胸骨などを使用するものが多数みられるためである。ここでも、弥生時代後期よりもさらに様々な整形・加工、焼灼の技術がみられる。寛骨や肋骨を用いた資料は特に焼灼痕がきれいな列状に施される。これらは肩甲骨の棘上窩や棘下窩よりも骨が厚いためか破損があまりみられず、観察が容易であることを加味しても、列状の焼灼痕が一目でわかる。焼灼痕の並び方が非常に規則的である。

6. ト骨技法の時期的変遷

前期のト骨の特徴として、四肢骨を使用する点、また四肢骨は切断後に骨の内側からも焼灼がなされる点が挙げられる。つまり、平坦な部分を必要とせ

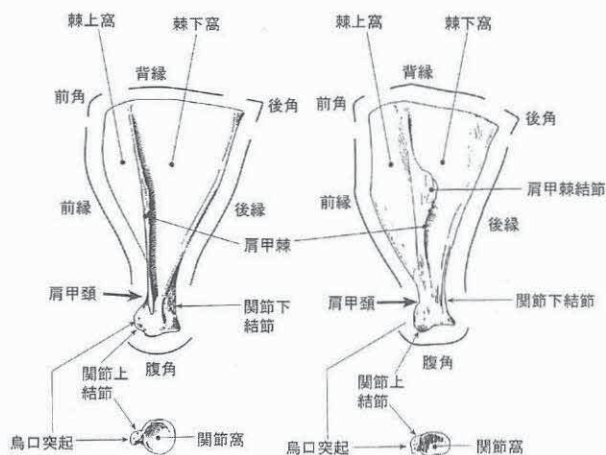


図5 肩甲骨の部位の名称（左：シカ、右：イノシシ）
（鳥取県教育文化財団、2001を一部改変）

ず、また骨自体を薄く加工することもないことから、骨の薄さも必要としなかったと考えられる。これは、神澤氏が早くから指摘しているように、神澤分類の第Ⅱ形式において、焼灼は骨の比較的厚い箇所に加えられる傾向が強いとしている（神澤，1990）。シカの肩甲骨を使用したト骨では、肩甲頸付近、胸縁、椎骨縁の両端（上角，下角）、肩甲棘の部分の反対側に焼灼が目立つ。これらの部分は厚みがあるため残存しやすく、結果的に焼灼が加えられた率が多いように見える可能性も存在する。しかし、肋骨を使用したト骨においても、骨の厚い部分の内外両面に灼痕があるから、骨の各面を使用する必要上、厚みのある部分を意識的に焼灼したことは誤りない（神澤，1990）。前期におけるこのような傾向は宮崎も指摘している（宮崎，1999）。

中期以降に使用部位は肩甲骨へと一斉に変化した。整形・加工技術は施されないか、肩甲棘を一部除去する程度であり、焼灼痕もまばらに施される程度であった。焼灼痕は骨の薄い棘上窩、棘下窩に施されることが多いものの、骨の厚い肩甲頸にも比較的よく焼灼が行われた。

く焼灼が行われた。

後期になると、中期に特徴的なあまり加工を施さない技術も継続する一方で、肩甲骨の平板化を目指す動きが強くなる。また弥生時代後期末～古墳時代にかけても同様の傾向がみられる。技術の進歩に伴う骨の規格化はみられない。後期になるとケズリDの加工を持つ例が増えてくるが、これが見られる遺跡は青谷上寺地遺跡の他に岡山県上東遺跡と神奈川県池子遺跡のみである。この池子遺跡のト骨は、使用部位をみると三浦半島の間口洞窟遺跡や大浦山遺跡、毘沙門B洞窟遺跡、海外洞窟遺跡などや房総半島のこうもり穴洞穴遺跡、本寿寺洞穴遺跡などと共通して、肩甲骨以外の部位を使用する。しかし、ケズリや焼灼パターンをみると青谷上寺地遺跡の例に類似する。

7. 動物種とト占技法

ト骨の素材に用いた動物種の中で、その整形・加工、焼灼技術に違いがみられるかどうかを検討する。図6に前記と同様の分類基準で区分したものを示し、

弥生時代中期

	ケズリ A	ケズリ A'	ケズリ B	ケズリ C	ケズリ Da	ケズリ Db	ケズリ D
焼灼1	3						
焼灼2	13	16	11	2	1		
焼灼3							
焼灼4							
焼灼5					1		

弥生時代後期

	ケズリ A	ケズリ A'	ケズリ B	ケズリ C	ケズリ Da	ケズリ Db	ケズリ D
焼灼1			2				
焼灼2		6	4	3			
焼灼3							
焼灼4	2			1			
焼灼5	1				1	4	

弥生時代後期～古墳時代前期

	ケズリ A	ケズリ A'	ケズリ B	ケズリ C	ケズリ Da	ケズリ Db	ケズリ D
焼灼1	1						
焼灼2		1	2	3			
焼灼3							
焼灼4				3			
焼灼5						2	1

弥生時代中期

	ケズリ A	ケズリ A'	ケズリ B	ケズリ C	ケズリ Da	ケズリ Db	ケズリ D
焼灼1	2	1	1				
焼灼2	9	4	3		1		
焼灼3	1	1					
焼灼4							
焼灼5	1		1				

弥生時代後期

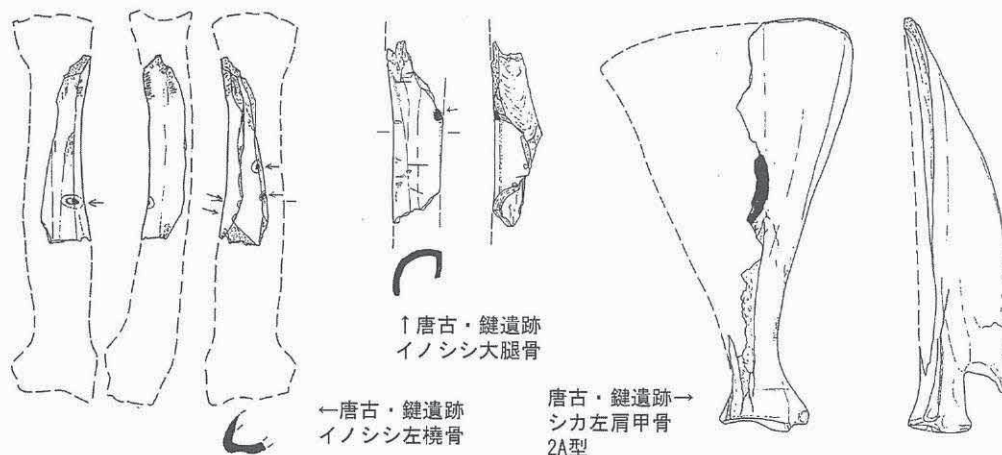
	ケズリ A	ケズリ A'	ケズリ B	ケズリ C	ケズリ Da	ケズリ Db	ケズリ D
焼灼1			3				
焼灼2		2	2	2			
焼灼3		2					
焼灼4	2			1			
焼灼5	3	1	1			5	

弥生時代後期～古墳時代前期

	ケズリ A	ケズリ A'	ケズリ B	ケズリ C	ケズリ Da	ケズリ Db	ケズリ D
焼灼1						1	
焼灼2			1	3			1
焼灼3	2						
焼灼4	1						
焼灼5	1		1	2	2	2	1

図6 イノシシとシカの「ケズリ」と「焼灼パターン」の時期別区分（左図：イノシシ，右図：シカ）
※セルの色の濃いものほど点数が多いものを示す

弥生時代前期



弥生時代前期～中期



弥生時代中期

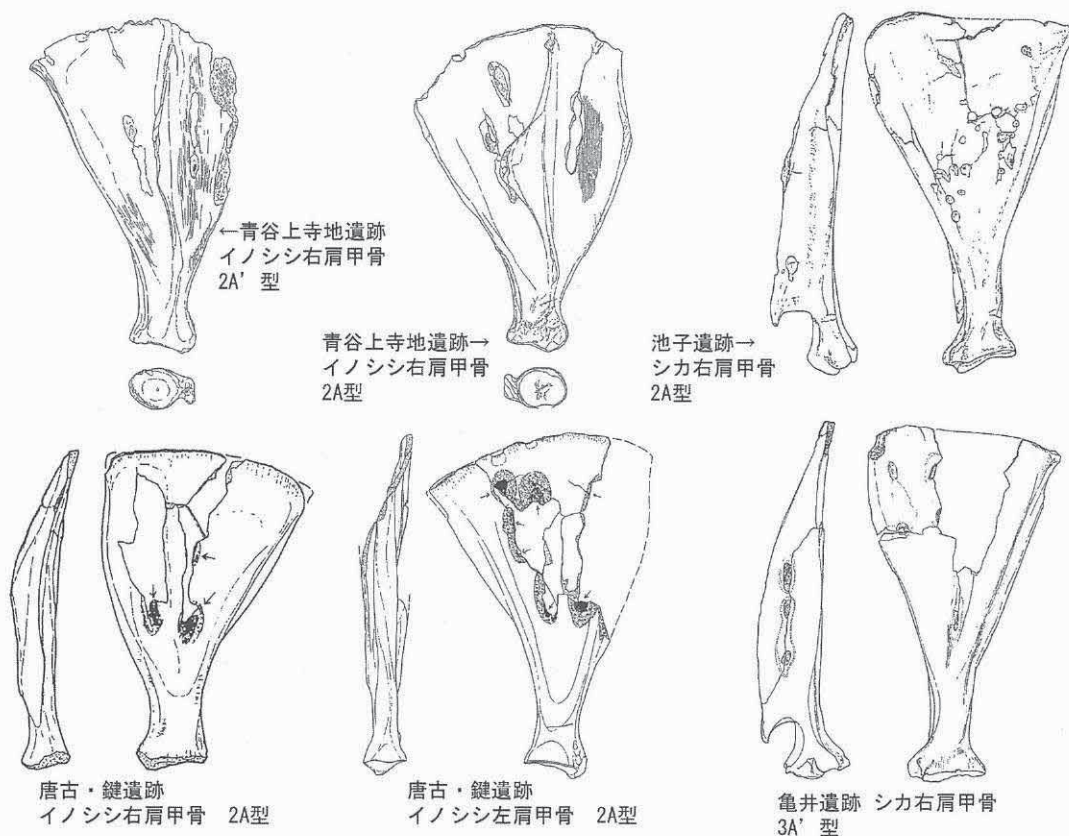
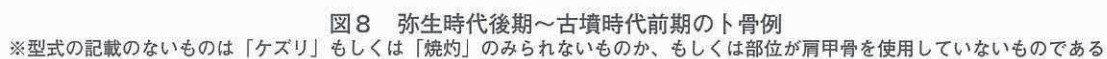


図7 弥生時代前期～中期のト骨例

※型式の記載のないものは「ケズリ」もしくは「焼灼」のみられないものか、もしくは部位が肩甲骨を使用していないものである

弥生時代後期、古墳時代前期



イノシシとシカで比較する。イノシシが92例、シカが69例である。

イノシシでは弥生時代中期には焼灼パターンはほとんどが「焼灼2」に集約する。ケズリは「ケズリA」と「ケズリB」に集中する。特に「焼灼2」に集中する傾向はシカより顕著である。つまり、中期段階での焼灼箇所は棘上窩や棘下窩の骨の薄い箇所をかなり意識的に選択していた可能性が高い。しかし、整形・加工技術は肩甲棘を削らないか、一部削る程度であった。イノシシの肩甲棘はシカと異なり、棘下窩方向に大きく湾曲するため、肋骨面から焼灼をあて外側面の亀裂で占うとすれば、棘下窩の焼灼面積がかなり制約される。それにもかかわらず、肩甲棘への加工が行われないことは、この時期のト骨はあまり大きな面積も求めず、焼灼も数が少なくまばらであることと関係すると思われる。

弥生時代後期のイノシシのト占技法は、弥生時代中期の整形・加工技術もみられる一方で、「ケズリC」や「ケズリD」、「焼灼4」や「焼灼5」といった技術も見られるようになる。これらの技法は、ほぼ同じ頻度で見られる。

また、イノシシを使用したト骨の中に、加工が施されていない肩甲棘への焼灼はみられない。これはイノシシとシカの肩甲棘の形態の違いによるものと考えられる。シカの肩甲棘はイノシシのものと比較して背面に向かって直立するが、イノシシの肩甲棘は棘下窩方向へと大きく湾曲する。このため、シカの肩甲棘が棘部分の左右に、列状の焼灼痕を施すことが可能な焼灼面積を得やすいのに対して、イノシシは焼灼面積が制限されるためと考えられる。

シカを用いたト骨は、弥生時代中期には「ケズリ

A」や「ケズリB」と「焼灼2」の組み合わせパターンが多くみられ、全体的な傾向はイノシシを用いたト骨と一致するが、イノシシを用いたト骨と比較すると集約的ではなくバラエティに富む。また弥生時代後期に至ってもこの傾向はみられ、イノシシを用いたト骨に比べて、整形・加工技術も焼灼技術も様々であったことがわかる。

木村幾太郎氏は壱岐島のカラカミ遺跡と原ノ辻遺跡出土のト骨を検討する中で、焼灼痕の大きさや色、骨の収縮などから、イノシシとシカのト骨に加えられた熱の違いを指摘している。今回の検討では、そのような熱の違いについては確認できなかったが、今後更なる詳細な観察と検討が必要であると考えられる。

8. ト骨技法の地域的変化

図9に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての東西の地域性を示した。東海地方を境に東と西で「ケズリ」「焼灼」の技術をシカを用いたト骨とイノシシを用いたト骨で分けて提示した。弥生時代中期の資料は大半が西日本の遺跡出土のものであるため、弥生時代後期及び弥生時代後期～古墳時代前期とした資料のみを扱った。

東日本ではシカ、イノシシ共に肩甲頸に焼灼する「焼灼1」はみられない。一方、西日本では肩甲頸への焼灼である「焼灼1」がシカ、イノシシともにみられる。また、東日本の方が西日本に比べて、全体的にケズリにみられる整形・加工技術はすすみ、焼灼痕も広い面積にみられるようになる。西日本では中期段階の「ケズリ」や「焼灼」がともに少ない技法を維持しつつ、さらに手を加えた加工や焼灼がみられるのに対し、東日本では中期段階の技術から

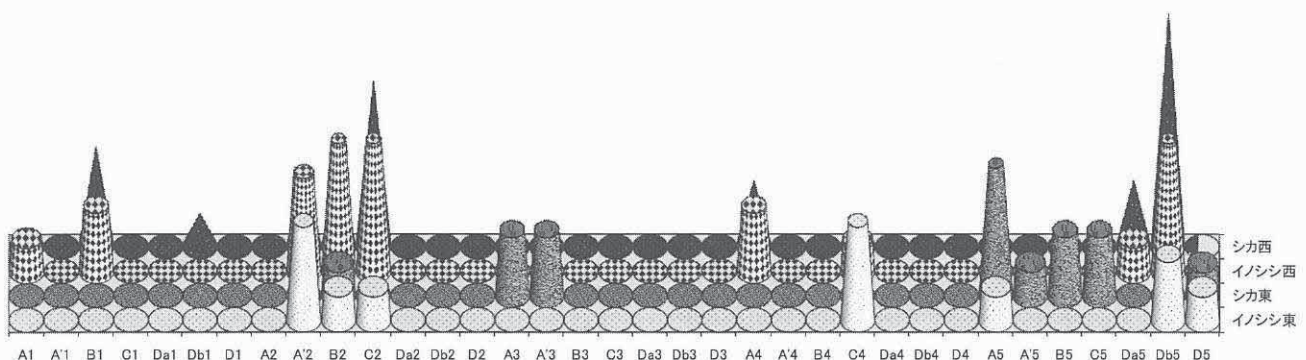


図9 シカとイノシシにみられるト骨技術の地域性
※A1～D5は「ケズリ」A～Dと「焼灼パターン」1～5までを組み合わせたものである

早々に移行し、より手の込んだ加工や焼灼を積極的に行った様相がみられる。

さらに、地域を細かく見ていくと、弥生時代後期に三浦半島、房総半島を中心とした地域では、他地域と異なる整形・加工技術、焼灼パターンがみられる。またト骨に用いる種や部位も異なる。ただし、池子遺跡では、種や部位は三浦半島と共通するが、加工技術や焼灼パターンが青谷上寺地遺跡などと共通する様相がみられる。後期以降のト骨の焼灼痕は、肩甲骨以外の寛骨や肋骨を使用した場合でも、きれいな列状に焼灼が施されることから、次第に焼灼痕の規則性が重要になってきたと考えられる。これは房総半島や三浦半島で特に多くみられる。このような肩甲骨以外の部位を用いた例は、次の古墳時代以降のト骨使用部位に肋骨が増加することと関連すると考えられる。つまり、列状に焼灼を施すことを規範としたト占技法がここで成立してきたと考えられる。このト占技法は古墳時代、古代を通していても、東海地方以東にしかみられない。

また長野県の生仁遺跡や静岡県長の崎遺跡などの焼灼痕は焼灼同士の間隙に出来ないほど多量な焼灼を施す。このような例は長野から静岡にかけての地域にのみ見られる。弥生時代後期にみられるこのような多様性は地域的側面が非常に強く、このことは弥生時代の伝播と深く係ると考えられる。

謝辞

本論をまとめるにあたり、国立歴史民俗博物館教授の西本豊弘先生には多くのご指導をいただきました。國學院大学の阪本是丸教授、杉山林継教授、吉田恵二教授、内川隆志准教授、加藤里美講師には様々な面でご支援いただき、論文掲載の機会を与えていただきました。厚くお礼申し上げます。

本研究は、平成21年國學院大學院友神職会COEプログラム後継事業研究者育成奨学資金を受けて行った成果の一部である。

註

(1)この他に、阿方遺跡からシカの左肩甲骨を使用したものが1点出土しており、報告書では前期と記載されているが、梅木はこれを前期末から中期前葉としている

ため、こちらを採用する(梅木, 2001)。

また、古浦遺跡からシカの中足骨を用いた弥生時代前期後葉と思われるもの1点が出土しており、金関丈夫氏は弥生時代前期としているが(古浦遺跡調査研究会他, 2005)、神澤勇一氏は焼灼形式その他から弥生時代中期・後期の諸例との間に共通性、接続性が認められないとし、古墳時代のものとするのが適当であるとしているため、ここでは扱わない(神澤, 1990)。

参考文献

- 梅木謙一 2001 「愛媛県出土の弥生時代動物関係資料」『久保和士君追悼考古論文集』
大阪府立弥生文化博物館 1992 『平成4年春季特別展 弥生の神々―祭りの源流を探る』
大阪府立弥生文化博物館 1996 『平成8年春季特別展 卑弥呼の動物ランドーよみがえった弥生犬』
大阪府立弥生文化博物館編 1998 『平成10年春季特別展 図録 縄紋の祈り・弥生の心―森の神から稲作の神へ』
大阪府立弥生文化博物館 2006 『大阪府立弥生文化博物館 弥生画帖―弥生人が描いた世界』
大阪文化財センター 1983 『亀井一近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』
金関丈夫 2004 「ト骨談義」『古浦遺跡』 古浦遺跡調査研究会・鹿島町教育委員会
神澤勇一 1976 「弥生時代、古墳時代および奈良時代のト骨・ト甲について」『駿台史学』 38
神澤勇一 1979 「骨トと亀ト―関東古墳時代の事例と対馬の亀ト」『えとのす』 第11号
神澤勇一 1987a 「日本のト骨」『考古学ジャーナル』 No. 281
神澤勇一 1987b 「ト骨」『弥生文化の研究』第8巻(金関丈夫・佐原眞編)
神澤勇一 1990 「呪術の世界―骨トのまつり」『考古学ゼミナール 弥生人のまつり』(石川日出志編) 六興出版
北浦弘人 2001 「第4章 出土遺物 第7節 骨角器」『鳥取県教育文化財団調査報告書72 鳥取県気高郡青谷町 青谷上寺地遺跡3―一般県道9号改築工事(青谷・羽合道路)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ』 鳥取県教育文化財団
北浦弘人 2002 「鳥取県青谷上寺地遺跡出土のト骨」『考古学ジャーナル』 No.492
北浦弘人 2006 「第2章 第7節 第9項(6) 骨角器」『鳥取県埋蔵文化財センター発掘調査報告書10 鳥取県鳥取市青谷町 青谷上寺地遺跡8―第2～第7次発掘調査報告書』 鳥取県埋蔵文化財センター
北浦弘人 2008 「青谷上寺地遺跡出土ト骨の属性類型の再検討について」『鳥取県埋蔵文化財センター 調査研究紀要』 2
木村幾多郎 1979 「長崎県壱岐島出土のト骨」『考古学雑誌』 第64巻4号
古浦遺跡調査研究会・鹿島町教育委員会 2005 『鳥根県

- 八束郡鹿島町大字古浦 古浦遺跡】
- 田原本町教育委員会 1984 『田原本町埋蔵文化財調査概要2 昭和58年度唐古・鍵遺跡—第16・18・19次発掘調査概報 黒田大塚古墳—第1次発掘調査概報】
- 田原本町教育委員会 1986a 『田原本町埋蔵文化財調査概要3 昭和59年度唐古・鍵遺跡—第20次発掘調査概報 黒田大塚古墳—第2次発掘調査概報】
- 田原本町教育委員会 1986b 『田原本町埋蔵文化財調査概要4 昭和60年度唐古・鍵遺跡—第22・24・25次発掘調査概報】
- 田原本町教育委員会 1988 『田原本町埋蔵文化財調査概要6 唐古・鍵遺跡—第21・23次発掘調査概報】
- 田原本町教育委員会 1989 『田原本町埋蔵文化財調査概要11 昭和62・63年度唐古・鍵遺跡—第32・33次発掘調査概報】
- 千葉大学文学部考古学研究室 2000 『千葉県勝浦市 本寿寺洞穴・長兵衛岩陰 第1次発掘調査概報】
- 千葉大学文学部考古学研究室 2001 『千葉県勝浦市 本寿寺洞穴・長兵衛岩陰 第1次発掘調査概報】
- 千葉大学文学部考古学研究室 2002 『千葉県勝浦市 こうもり穴洞穴 第1次発掘調査概報】
- 千葉大学文学部考古学研究室 2003 『千葉県勝浦市 こうもり穴洞穴 第2次発掘調査概報】
- 千葉孝弥 2002 「多賀城市山王遺跡出土のト骨」『考古学ジャーナル』No492
- 鳥取県教育文化財団 2000a 『鳥取県教育文化財団調査報告書67 鳥取県気高郡青谷町 青谷上寺地遺跡1—一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ】
- 鳥取県教育文化財団 2000b 『鳥取県教育文化財団調査報告書68 鳥取県気高郡青谷町 青谷上寺地遺跡2—一般県道9号改築工事（青谷・羽合道路）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ】
- 鳥取県教育文化財団 2002 「第7節 骨角器」『鳥取県教育文化財団調査報告書74 鳥取県気高郡青谷町 青谷上寺地遺跡4—一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ】
- 中村 勉 2002 「三浦半島におけるト骨・ト甲研究の現状」『考古学ジャーナル』No492
- 新田栄治 1977 「日本出土ト骨への視角」『古代文化』第29巻第12巻
- 宮崎泰史 1982 「第Ⅶ章 出土遺物の概説 第3節 亀井遺跡出土のト骨について」『亀井遺跡—寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ】 大阪文化財センター
- 宮崎泰史 1984 「第Ⅵ章 検出された遺物 第6節 亀井遺跡出土のト骨について（Ⅱ）」『亀井遺跡—寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ】 大阪文化財センター
- 宮崎泰史 1999 「第3章 墓とまつり 3まつりの品々」『平成11年春季特別展 渡来人登場—弥生文化を開いた人々】 大阪府立弥生文化博物館
- 渡辺 誠 1991 「郡谷里貝塚出土のト骨研究—韓国における考古民族学的研究・Ⅴ」『名古屋大学文学部研究論集史学』vol.37-110
- 渡辺 誠 1995 「全羅南道郡谷里貝塚出土のト骨」『日韓交流の民族考古学】
- 渡辺 誠 2002 「ト骨・ト甲でなにが占われたのか」『考古学ジャーナル』No492